

## アンコール現地レポート 16

### サムロンセン旅行記 - ヴァナの現場を訪ねて -

#### <はじめに>

深夜、薄暗い電気のない部屋の中、異常なまでの痒み<sup>かゆ</sup>が背中から腰にかけて走った。失敗の原因は、ハンモックにつける蚊帳<sup>かや</sup>だった。就寝前<sup>おあや</sup>、大家から「この蚊帳<sup>かや</sup>だと体の接着する部分を蚊に刺される」と忠告を受けたのだが、去年11月、コー・ケーという辺境の遺跡で野宿した時でも問題がなかったと説明し、その忠告を軽く受け流してしまった。

他の人が箱型に張り巡らされた蚊帳<sup>かや</sup>の中で床の上に寝たのに対して、その夜、私だけがハンモックで寝た。その結果、背中、腰<sup>ひじ</sup>、肘<sup>ふともも</sup>、太股、足先など蚊帳<sup>かや</sup>に直接、接している部分は例外なく蚊の攻撃対象となった。絶え間なく襲う痒み<sup>かゆ</sup>から、ウトウトしては目が覚める浅い眠りを繰り返し、ようやく次の日の朝を迎えた時には、100ヶ所以上も蚊に刺された跡が残っていた。高床式の家屋の眼前に見渡す限り広がる湿地帯の地平線からちょうど朝日が美しく昇り始めていた。この美しい爽快<sup>そうかい</sup>な光景とは裏腹に、私のサムロンセンでの最初の朝は、痒み<sup>かゆ</sup>と不眠のけだるさが入り混じったものであった。

#### <サムロンセン>

サムロンセン (Samrong Sen) は、コンポン・チュナンの北20kmほどに位置する、20世紀初頭にカンボジアの先史時代の貝塚遺跡として紹介されて以来、カンボジアを代表する貝塚遺跡として有名なところである。しかし、長く続いた内戦の影響もあり、学術的な研究がなされないまま現在にいたっている。そもそもカンボジアでは今まで本格的な貝塚遺跡の発掘調査がなされたことはほとんどないのが実情である。

上智大学博士課程後期に在籍するリー・ヴァナ (Ly Vanna) 君は、こうした状況に憂慮し、1998 年から同遺跡の発掘調査を続けている。この地域は、現在でこそ治安は安定しているが、ポル・ポト軍と政府軍との激戦地で、戦闘により、村が焼かれ、犠牲者が出たところである。彼が調査を始めた頃は、まだ、ポル・ポト軍の残党が周辺を徘徊する、きな臭い雰囲気<sup>はいかい</sup>が漂う地域だった。しかも、その発掘調査自体、諸外国の発掘調査団やカンボジア文化省などによる組織だったものではなく、彼自身が財団などから資金を調達して行った自主的なものだった。これは特筆すべきことである。彼のような若者が今後のカンボジア考古学会を担って行くだろう。

いまだにサムロンセンは外国人が訪ねるのは極めて難しい地域だが、今回、ヴァナ君に同行し、彼が行っている発掘調査現場を見学する機会を得た。なお、彼によると、多分、私が、内戦以降、同地域に入った初めての外国人になるだろうということだった。

6月1日、シェムリアップを出発。朝一番の飛行機に乗り、まずプノンペンへと向かう。プノンペンの空港到着後、ヴァナ君の住む義理の父親の家を目指す。彼との待ち合わせ時刻、8時半ちょうどに彼の家に到着するが、彼は発掘に必要な資材の購入に出発して留守だった。「もう、すでに出発しているのでは」と、かすかな不安感があったので、ホッと一息し、彼が戻るまで待つ。彼は9時前に戻って来た。そして目的地に向けていざ出発となった。今回の発掘には、ヴァナ君の他、プノンペン芸大の卒業生、男女4名が調査に参加している。うち男性2人は現在、現場で発掘作業を続けており、今回、サムロンセンに出掛ける一行は、ヴァナ君と2人の女性考古学者、そして私の計4名である。

家を出てバス停に向かい、ちょうど出発寸前のバスに乗り込むことが出来た。バスは9時きっかりに出発、3時間後の12時にコンポン・チュナンへ到着した。クッションの入った座席で、エアコンも装備されている快適な車両だった。途上国のバスと言え、ポン

コツの車輛で、座席もガタガタだという既成概念があったので、その仕様の良さに驚いた。しかも、コンポン・チュナンまでのバス代は5000リエル（約150円）だった。

コンポン・チュナンに到着し、そこで昼食を簡単に済ませた後、バス乗り場からバイクで5分程のところにある船着場に向かった。1時出発予定のサムロンセン行きの船に乗り込む予定で、余裕をみて出発時刻より30分程前に到着したのだが、すでに船は出発してしまったという。彼も今までにそんな経験はなかったという。1日に1便しかない定期便で、そう簡単にサムロンセンに向かう別の船を見つけることなど出来そうもない。仕方がないので、小船を一艘<sup>そう</sup>借り上げ、それでサムロンセンへ向かった。通常であれば1人2000リエル（約60円）、4人で計8000リエルで済むところを、一艘<sup>そう</sup>で5万リエル（約1500円）支払う羽目になった。

#### <サムロンセンへ到着>

その代わりに貸し切り船のため、ちょっぴり優雅でのんびりとした船旅を楽しむことが出来た。コンポン・チュナンを出港し、トンレ・サップ川を1時間ほど北上した後、西に延びる支流のチニット川（Steung Chinit）に入る。その支流を<sup>さかのぼ</sup>遡ること1時間強でサムロンセンの村に着いた。

コンポン・チュナンからサムロンセンまでの船での航行距離は20km弱なのだが、ともかく船足は遅く、のんびりと船上からの風景を楽しんだ。ところどころに低い樹木が生えている以外は、雑草と葦類の繁る一面の湿地帯の風景が広がる。この辺り一帯は、雨期の末期の水位が増加する時には、完全に水面下に没してしまうという。川面より6~7mの高さの樹木の頂部には、昨年の高水位の証拠のように枯れた藻類が引っかかっていた。その中をゆっくりと上流に向かう船上で、アマゾン川をピラニアやワニの脅威を感じながら<sup>さかのぼ</sup>遡るようなとまでは言わないが、どこかそれに繋がるような感覚に襲われた。その感

覚を楽しみながら、途中、少し寄り道をしたため、夕方 4 時半ごろにようやく目的地のサムロンセンに到着した。



サムロンセンの船着場。写真に見える船が私達の乗って来た船。また、土手に白く見えるのが全て貝殻

到着してまず目に入ったのが、船着場となっている土手にびっしりと層をなしている貝殻だった。ヴァナ君によると村の至る所に貝塚の層が見られ、近年までその貝殻を掘り起こし、石灰の原料にしていたという。船を降り、緩やかな傾斜地を 100m 程上った先に、ブルーシートで覆われた区画が目に入った。そこが、ヴァナ君が発掘調査を行っている発掘区であった。

#### < 発掘調査 >



シートの屋根の下では、1m角毎に水糸が張られ、私たちが到着した時には、泥まみれになりながら 2 人の芸大卒業生が一生懸命、発掘作業をしていた。すでに夕方だったので、暫くして作業を終了し、次の日、現場をゆっくりと見学させてもらうことにした。



発掘区の大きさは 3m x 2m で、発掘が開始から 3 週間が過ぎ、すでに 4m 近く掘下られていた。垂直に掘り込まれたトレンチの四面の壁面には、<sup>おびただ</sup>夥しい数の貝殻の蓄積が見られる。地表から穴の最深部まで貝殻が層をなして堆積している。大多数の貝はシジミぐらいの大きさの二枚貝で、長細い二枚貝や巻貝もわずかながら出土している。これほど大量の貝殻の堆積があるにもかかわらず、村人の話によると、現在、この周囲では同種の貝は採れないという。

1m角に区切られた水糸を基準として作業が進む。掘り出した土砂はバケツにいれ、紐で吊り上げて排出する。

貝類以外にも、数多くの動物や魚類の骨や土器片も出土している。地表面より 60cm 程下の層からは白磁の絵付け鉢の破片が出土したという。また鉄器、銅器も 2~3 片出土しているという。今後、数カ所から木炭を採取し、炭素同位法による遺構の年代測定を行う予定だという。また出土した動物や魚類の骨などから古代の人々が貝類以外にどのようなものを食べていたかが推測できそうだともしいう。

魚の背骨だという出土した骨を見せてもらったが、直径 4~5cm ぐらいで、とても私には魚の骨には思えない代物だった。体長 1m 以上の大魚の背骨だったらしいという。現在でもメコン川のクラチエ付近には川イルカが生息しているが、当時の人々の食卓を、それに匹敵するような大型魚が賑わっていたのかと想像すると興味は尽きない。しかし、発掘作業は 1m グリットに仕切られた区画毎に、深さ 10cm ずつ掘り進み、それを取り出し、それを個別に分析するという手順で進められているという。掘り出した土砂などはバケツに入れ、紐で吊り上げて持ち出すという、根気と体力を必要とする作業である。

なお、今後の研究のなかで期待される興味深いものの一つとして、カンボジアの古代米の変遷が挙げられる。土器の製作過程で胎土に混入した<sup>たいど</sup>朮殻と、土器自体の変遷の研究を連動して行うことにより、米の歴史的な変遷を明らかにしようというものである。

#### <サムロンセンの村>

サムロンセンは、北緯約 12°20、東経 104°50 に位置する、家屋数 235 戸、人口 1237 人という小さな村である(ヴァナ論文)。村はチニット川が L 字型に蛇行する地点の西岸にあり、その中心には鉄筋コンクリート製の大きなワット(寺院)の本堂が<sup>そび</sup>聳えている。

このワットを中心として、現在の行政区分では、村の北側はサムロンセン地区、南側はポ・プロ(Po Prok)地区と呼ばれている。このワットから南北両地区に向かって街路が



サムロンセン地区の中央を貫く街路。その両脇に高床式の家屋が建ち並び、街路奥に見えるのが寺院本堂。

延び、その両脇に家屋<sup>かあく</sup>が建ち並んでいる。北側のサムロンセン地区の方が、家屋が多く、その地区にはもう一筋の街路があり、それに沿って家並み<sup>いえな</sup>が続いている。

村の中心のワットは、この地域では最も高い丘陵地に建設されている。と言っても、それは周囲を高さ 1m 程の擁壁<sup>ようへき</sup>で囲った人工の盛土の上に建設したようなものであり、それ以外の建物は全て高床式住居である。この地帯一体は、雨期の末期には水位の上昇で冠水<sup>かんすい</sup>するため、それを想定して各家は高床式になっているという。しかも、この村の中心のワットから離れるにつれて地面は低くなるため、村の外側の家屋ほど床が高い。ひよろ長い柱の上に家屋が建っている。村の外れの家屋の床は地面からの高さは 5~6m にも達している。しかし、このような努力をしても、去年の水害では、多くの家屋が床上浸水したという。

家屋は基本的には木造だが、コンクリート造りの家屋もちらほらと目立つ。屋根は瓦葺<sup>かわらぶき</sup>の家も数件見られるが、基本はトタン葺<sup>ぶ</sup>きと草葺<sup>くさぶ</sup>きで、それが半分ずつぐらいで、金銭的に余裕のある家がトタン葺<sup>ぶ</sup>きのようである。建物構造の基本は切妻屋根の家屋で、その前面部に勾配を緩くした庇<sup>ひさし</sup>を延ばすのが標準形式のようである。基本の切妻家屋の前後に別の切妻家屋を接続して内部空間を拡張している大きな家もあった。カンボジアではこのような形式の家屋を「プティア・カントン」と呼ぶ。側面から見ると、大きな妻面を中心に、その脇に小さな妻面が建ち並ぶのが特徴である。

#### < 宗教と日常生活 >

こうした形状の家並みの中で、村のランドマークとして一際、目を引くのが村の中央に建つ寺院本堂である。長さ十数 m を超え、中央には塔が聳え、釉薬のかかった瓦<sup>かわら</sup>に覆われた三段の折り返しの付いた屋根が載っている建物である。周囲一面は湿地帯で、その建



村の中心に建つ寺院本堂

設に必要なコンクリートも砕石もすべて遠方から運搬しなければならぬ陸の孤島のようなところにある建物である。これだけの建物を建立することは、村人全体の相当の寄付と奉仕がなければとても難しいだろう。本堂の南側には子供たちのための寺子屋があり、建物からは、先生の声に合わせて復唱する子供たちの元気な声が聞こえてくる。カン

ボジアの暮らしの中でのお寺の役割は、ただ単に宗教的な施設というだけでない。教育・文化施設であり、「寺院 + 学校 + 公民館」など複合的な公共機能のほとんどを担っており、村の暮らしの中心的存在になっていることが窺<sup>うかが</sup>える。

ところで驚いたことには、夜 7 時になると、一斉に各戸に明かりが灯った。この辺境の村で、と一瞬疑問に思ったが、聞けば、お寺が発電機を設置しており、夜 7 時から 9 時の間、村人に電気を供給しているのだという。電球 1 つ分の電力に対して月 6000 リエル（約 180 円）の電気代をお寺に支払うのだそうだ。この電球が 1 つのお陰で、夜の楽しい団樂の一時を過ごすことができる。

夕食が終わる頃には、お寺から楽しくなる音楽が聞こえてくる。「何かお祭りでも」とヴァナ君に聞いたところ、夕食後には、お寺が境内の護岸建設のための土運びの勤勞奉仕を村の若者をお願いしており、その作業を元氣付けるための音楽だという。現場に行ったところ、村の男女の若者数十人が土砂を採掘し、それを楽しげに運んでいた。若人には、これが男女が親交を深め、夜の余暇を過ごす場になっているということだった。

人々の暮らしの基本は漁業で、高床式家屋の床下には、<sup>あし</sup>葦で作られた漁具が数多く収納されている。川の水は泥水で、透明度はほとんどゼロに等しい。しかし、この水が、水浴び、洗濯そして飲み水に使われており、彼らの生活には必要不可欠で大切な水である。数

メートルもの貝塚の層が示している通り、遙か昔からこの地を住まいとしてきた人々には、トンレ・サップ湖とそこに流れ込む河川の水は生活を支える貴重な源なのである。そこで育まれた魚介類は、今も昔も変わりなく彼らの生活の糧<sup>かて</sup>として利用されている。蚊の大群に襲われるというハプニングはあったが、カンボジアの自然と密着した生活に触れて心が洗われる気持ちであった。

2001年6月10日

シェムリアップ、上智研修所にて

荒樋久雄